



## 第2回 国際開発プランニングコンテスト2009

### 報告書

主催 国際開発プランニングコンテスト実行委員会

2009. 12. 21 (月) ~24 (木)  
国立オリンピック記念青少年総合センター

# 目次

---

## 全体

---

- 01.代表挨拶
- 02.日時・場所・主催・参加人数・参加費
- 03.コンテスト全体の主旨・ケースの意図・審査基準
- 04.参加者の選考分野・大学・学年
- 05.スケジュール

## コンテスト当日

---

- 06.開会式
- 07.アイスブレイク
- 08.目標設定
- 09.プランニングの様子
- 10.基調講演 一講師紹介・話の概要・参加者の声
- 11.プレゼン講座 一講師紹介・話の概要・参加者の声
- 12.座談会 一講師紹介・話の概要・参加者の声
- 13.クリスマス・イヴイヴイヴパーティ
- 14.中間発表・最終発表
- 15.表彰プラン紹介
- 16.その他プラン紹介
- 17.審査員紹介と講評
- 18.フィードバック
- 19.閉会式
- 20.懇親会
- 21.アンケートより

## 弊団体について

---

- 22.団体概要・編成図・一年間の活動・スタッフ
- 23.団体理念・目的
- 24.定期ミーティング
- 25.模擬コン
- 26.ケース作成
- 27.広報
- 28.決算報告
- 29.協賛団体

## 01.代表挨拶

---

途上国の人々のために何かしたい！ そんな声をよく耳にします。

2009年、アメリカでオバマ政権が発足し、社会企業や Base of Pyramid(BOP)ビジネスへの関心が一層高まり、気候変動枠組み条約締約国会議(COP15)が開催されました。世界中の人々が、何かが変わってきていると感じ、自分以外の世界に目が向いて、世界に溢れる問題に対して行動を起こしています。

日本国内でも、「将来的に国際問題に取り組む仕事に携わりたい」と、学生のうちから行動を起こしている人は格段に増えています。しかし、就職活動の際にその夢を置いて違う道に進む人がとても多い。それは、国際協力や国際開発の職業は完全な需要過多で働き口が少なく、また働くにあたって求められる能力が高いという理由からです。ただその選択も、自分の夢を新たに見つけた、という良い意味での選択ならともかく、ただ諦めるということではとても勿体ない。

国際問題は、途上国だけでなく日本の身近にも溢れています。環境問題や難民問題、麻薬問題など数えればきりがなく、一度問題に取り組むことを志した人にはその被害を受けている人々から目をそらさずに将来的にも取り組んでいってほしい。しかし、実際に国際問題を解決できる人になるには、高度な能力と専門性を備えなければいけません。支援後を考えない学校建設や機材の提供の例にあるように、善意が必ずしも良い結果になるとは限らず、逆に相手に悪影響が出ることもあり得ます。なので、将来国際問題を解決したいという夢を持つ若者には、求められる人格と能力を兼ね備えて、その夢を実現させてほしい。そして、問題解決のための様々な関わり方を示し、日本発のリーダーとして活躍してほしいと思います。

国際開発プランニングコンテスト(以下 idpc)実行委員会は、将来国際開発の分野で働きたいと本気で考える人を、心から応援します。2009年12月に第2回 idpc2009が開催され、全国から来た志の高い46人が参加しました。私たちは、当委員会が主催する idpc の参加者から夢を実現する人が必ず出ると信じています。

第2回 idpc2009 の開催には第1回 idpc2009 と同じく、大勢の方にご協力いただきました。第2回 idpc2009 の開催を支えてくださった皆様には、idpc 実行委員会を代表して感謝申し上げます。これからも idpc 実行委員会を支える人がいる限り活動を続けていきますので、今後とも御協力のほどよろしくお願い致します。

国際開発プランニングコンテスト実行委員会 代表  
成城大学 社会イノベーション学部 政策イノベーション学科 2年  
佐藤 淳

## 02.日時、場所、主催、参加費、参加人数

---

日時：2009年12月21日(月)～24日(木)

場所：国立オリンピック記念青少年総合センター

主催：国際開発プランニングコンテスト実行委員会

参加費：1,3000円

参加人数：47名

## 03.コンテスト全体の主旨、ケースの意図、審査基準

---

### 03-01.コンテスト全体の主旨

コンテスト全体としては、メインのプランニングの他に、講演会や座談会をはじめ様々なコンテンツを用意しました。それらを通じスキルアップや議論・交流の機会を参加者に提供しています。idpc 実行委員会は国際開発分野を目指す人たちの現状に対し、大きく分けて二つの問題意識を持っています。第一に必要なとされるスキルを身につける機会が少ないという点、第二に同じ志を持つ者同士の交流や議論の場が少ないという点です。当コンテストの種類豊富なコンテンツでこの二つの点を解決し、参加者が国際開発分野でのキャリアをより具体的に目指すことが出来るようサポートしていきます。次にコンテンツの中でも両問題点をカバーするプランニング（ケース）コンテンツについて詳しく紹介していきたいと思います。

### 03-02.ケースの意図

プランニングコンテンツは、実際にプランニング経験をしていただく貴重な機会です。チームごとに国際開発プロジェクトを立案し、それを外務省や JICA、NGO をはじめ国際開発分野で活躍する専門家の方に審査、またフィードバックを戴きます。自分達自身で作成したプランを専門家のコンサルティングのもと練り直す過程で、アイデアを実際のプロジェクトへと具体化する事の難しさ、厳しさを知ることが出来ます。開発分野はチームによって異なりますが、国際開発プロジェクトにおいて、いかに実現可能性という点が重要であるのか考える機会となるでしょう。また、具体的なアドバイスを専門家の方々から戴く事により、各チームは立案したプランに具体的に何が足りないのか知る事が出来ます。

更に、具体的なアドバイスを戴くこと以上に重要なのは、チーム内での活発な議論です。3日間のプランニングコンテンツを通して、自由闊達で深い議論を同じ志や目標を持つ仲間たちと交わすことにより、参加者一人ひとりの視野が広がり、個人に足りないものへ気付き、そして将来への課題を発見することを期待しています。

### 03-03.審査基準

プランは、10項目・4段階・20点満点で評価されます。10項目はそれぞれ 1) 妥当性 2) 有効性 3) 効率性 4) インパクト 5) 自立発展性 6) 主張と論拠の整合性 7) プランの魅力 8) 資料の分かりやすさ 9) プレゼンテーション力 10) 的確な回答が出来ていたか、です。項目1～7はプラン内容、8～10はプレゼンテーションに対する評価となっています。

尚、項目1～5は1991年にOECD開発援助委員会(DAC)が「DAC評価方針」の中で援助評価手段として提唱した5項目を採用しています。項目7は設定された評価項目以外で優れている部分を審査員個人の主観で評価して戴いています。

減点基準に関しては、プレゼンテーションの際参加チームが制限時間をオーバーした場合には総合得点から5点減点しています。

## O4.参加者の出身地・選考分野・所属大学・学年

### O4-1.参加者の出身地

コンテストの開催地が東京であることから、参加者の多くは関東近辺の大学・大学院生で構成されている。ただし、全体の3割は関東圏以外の遠隔地から足を運んでおり、参加者の意欲・意識の高さが窺える。

### O4-2.参加者の専攻分野

参加者の専攻分野は、昨年に引き続き、国際関係、開発経済、農業、医療、保健といった国際開発に馴染みのある分野から、文学、理工、家政、薬学といったその他の分野まで多岐にわたる。また、多くの参加者は専攻分野の他にNGOやNPOでの活動経験、学生団体を通じた国際協力の経験を有している。そうした原体験からの熱い思いが、プランニングを通して強く感じられた。

### O4-3.所属大学

地域別所属(or卒業)大学一覧 (※五十音順)

地域		大学	人数
国内 (44名)	関東 (32名)	青山学院大学	1
		大妻女子大学	1
		慶応義塾大学	6
		国際基督教大学	1
		国立看護大学校	1
		首都大学東京	1
		筑波大学	1
		千葉大学	1
		東京経済大学	1
		東京大学	6
		東京農業大学	1
		一橋大学	2
		法政大学	2
		明治大学	1
		立教大学	1
		早稲田大学	5
		関西 (10名)	関西外国語大学
	関西学院大学		1
	甲南大学		1
	神戸市外国語大学		1
同志社大学	3		
東北 (2名)	立命館大学	3	
	秋田大学	1	
海外 (3名)	国際教養大学	1	
	Maryville College	1	
	クイーンズランド大学	1	
		University of Oregon	1

## 04-4.学年

参加者は学生 44 名、社会人 3 名で構成されている。学年別に見ると、最も参加者が多いのは大学 3・4 年生である。



## 05.スケジュール

	12月21日(月) コンテンツ	場所	12月22日(火) コンテンツ	場所	12月23日(水) コンテンツ	場所	12月24日(木) コンテンツ	場所			
7:30 - 8:00			起床・朝食	ふじ	起床・朝食	ふじ	起床・朝食・チェックアウト	ふじ			
8:00 - 8:30			集合 ~8:50		集合 ~8:50						
8:30 - 9:00			アナウンス		アナウンス		プログラミング⑤ 9:00-9:45				
9:00 - 9:30			プログラミング・ケース説明				アナウンス 9:45-9:50				
9:30 - 10:00				センター棟 401号室		センター棟 402号室 ※前日と部屋が 違います。		国際交 流棟・ 国際 会議室			
10:00 - 10:30					プログラミング② 9:00-13:00 ※昼食は各自				最終発表 10:00-12:30		
10:30 - 11:00											
11:00 - 11:30											
11:30 - 12:00											
12:00 - 12:30											
12:30 - 13:00	受付 12:30-13:15		プログラミング①9:00-17:00 ※昼食は各自		ふじ		集合		ふじ	昼食 12:30-13:30	ふじ
13:00 - 13:30	開会式/チーム発表 13:15-14:05						中間発表 13:00-14:30			結果発表 13:30-14:10	
13:30 - 14:00										休憩 14:10-14:20	
14:00 - 14:30		センター棟 401号室							センター棟 402号室	イードバック 14:20-15:30	国際交 流棟・ 国際 会議室
14:30 - 15:00	山崎氏 講演会 14:05-15:05 (60)						アンケート記入 15:30-				
15:00 - 15:30	休憩 15:05-15:20						閉会式 15:45-16:20				
15:30 - 16:00	アイスブレイク 15:20-16:05 (45)						写真撮影				
16:00 - 16:30	目標設定 16:05-16:45 (40)				プログラミング③ 14:30-18:00		片付け・撤収				
16:30 - 17:00	アナウンス 16:45-16:50		集合 アナウンス								
17:00 - 17:30	宿泊棟へ移動	食事場 所:ふじ	夕食17:00~17:50	センター棟 401号室		食事場 所:ふじ					
17:30 - 18:00	夕食 17:30-18:30		集合~17:50						解散・懇親会行く人は移動		
18:00 - 18:30	集合~18:50		座談会 18:00~19:30 (90)		夕食18:00-19:00		懇親会 18:00-20:00	新宿駅 近く			
18:30 - 19:00											
19:00 - 19:30	プレゼン講座 藤沢烈氏 19:00-20:30 (90)	セン ター棟 401号 室	休憩・次のコンテンツ準備		プログラミング④ 19:00-21:00	セン ター棟 402号 室					
19:30 - 20:00								解散・懇親会行く人は移動			
20:00 - 20:30				クリスマス、イブ×3パー ティ 20:00~21:30 (90)							
20:30 - 21:00	自由交時間 20:30-21:50										
21:00 - 21:30			アナウンス と片付け		アナウンス と片付け		懇親会二次会 20:30-22:30	新宿駅 近く			
21:30 - 22:00	アナウンス										
22:00 - 22:30	宿泊棟へ移動、入浴		宿泊棟へ移動、入浴		宿泊棟へ移動、入浴						
22:30 - 23:00											

## コンテスト当日

---

### 06.開会式

---

初対面だが参加者同士すぐに打ち解けていた。開会式は代表挨拶や弊委員会の説明、4日間のスケジュール説明と共に各プログラムの意図の確認を行った。

### 07.アイスブレイク

---

サブコンテンツとして、初日に①参加者全体の一体感を高める②グループ員をより深く知るということを目標にアイスブレイクを実施した。このコンテンツではマーブルチョコをくじとして用い、決められたトークテーマに従って話す形をとった。教室のなかはどのテーブルでも笑いが絶えなく、アイスブレイクを機に一気にチーム員の中の距離が縮まったように感じた。また、参加者の方にも「初日に仲良くなることができよかった」という感想をいただいた。

### 08.目標設定

---

ただ「楽しかった」で終わるのではなく後に自分で成長を感じられるように、各自の目的意識や目標を確認した。またチーム内でお互いの目標を共有した。

### 09.プランニングの様子

---

3泊4日のプランニング中は真剣に討議したり、和やかに進めたりと各チームそれぞれにメリハリのついた時間を過ごしていた。

途中でインターネットが一時的に使えなくなるなどのハプニングもあったが、各チームが柔軟に対応しそれぞれの個性を生かしたプラン作成を行った。



## 10. 基調講演 一 講師紹介・話の概要・参加者の声

10-01. 講師：山崎 大祐氏（株式会社マザーハウス 取締役副社長）



大学卒業後、ゴールドマン・サックス証券入社。エコノミストとして、日本及びアジア経済の分析・調査・研究や顧客への金融商品の提案を行う。2007年3月、バイクによるアジア横断旅行の準備のために同社を退社するも、マザーハウス立上げメンバーとして経営に参画することを決意し、同年7月マザーハウス取締役副社長に就任。同社社長兼デザイナーの山口絵理子氏は、大学のゼミの先輩・後輩にあたる。



講演の様子

### 10-02. 概要

コンテスト初日に行われた講演では、山崎氏にマザーハウスの軌跡や自身のキャリア等についてお話いただいた。途上国に関わるビジネスを行うマザーハウスの話に興味を持つ参加者が多く、真剣に講演に耳を傾ける姿が印象的だった。また、異色の経歴を持つ山崎氏がどのような経緯で現在の仕事をするに至ったか、という話も興味深かったようだ。講演会後の質疑応答では参加者から質問が殺到し予定時間を大幅にオーバーしたことから、講演会が好評だったことを窺い知ることができる。

講演の最後には参加者に対して「机上の空論でいいから大きな夢を描いて欲しい」と学生ならではの発想でプランニングに望んで欲しいとエールをいただき、第2回国際開発プランニングコンテストは素晴らしいスタートを切ることができた。

### 10-03. 参加者の声

「今一番アツイ方の話が聞けたと思う。『日本に夢が描けないのに、途上国に何を与えられるか』という言葉に共感した」

「憧れの存在の話を直接聞くことができとても感動した」

「実務的な面のみでなく、教訓的、哲学的に学ぶことが多かった」



## 11.プレゼン講座 ー講師紹介・話の概要・参加者の声

---

### 11-01.講師:藤沢烈氏



株式会社RCF代表取締役。一橋大学卒業後、バー経営、マッキンゼーを経て独立。「100年続く事業を創る」をテーマに講演・コンサルティング活動に従事。国際援助NGOの設立にも関与し、現在は国内若者の海外での活動を支援。



講座の様子

### 11-02.概要

第一回 idpc に引き続き、効果的なプレゼンテーションの手法について講義をしていただいた。前回も大好評だったプレゼンテーション講座では、プレゼンテーションの手法について解説をいただいたのち、実際にパワーポイントを用いて参加者にプレゼンテーションをしてもらい、フィードバックをするという実践的な内容だった。

どんなに素晴らしいプランでも相手に伝わらなければ意味を成さない。データや資料を効果的に使う方法や相手に分かりやすく伝える話し方などは単純に見えて実は難しい。参加者からはコンテストの中間発表や最終発表に生かされたという声が多数寄せられ、相手に伝わるプレゼンテーションをすることの重要性を感じてもらえたようだ。

### 11-03.参加者の声

「テクニカルな講座ですぐ実践に移せた」  
「コンテストに限らず今後も役に立ちそう」  
「この様な講座ははじめてで、プレゼンは難しいということを知った」

## 12.座談会 —講師紹介・話の概要・参加者の声

### 12-01.講師紹介

<p><b>世界銀行東京事務所 広報担当官</b> <b>大森 功一（おおもり・こういち）氏</b></p>  <p>2000年より世界銀行東京事務所広報担当官として、NGO・シビルソサエティ、企業・企業団体、大学・研究機関との連携、環境、社会開発、農村開発、人間開発分野などでの日本との協力促進などを担当。 立命館大学、名古屋大学大学院、山口県立大学の客員教員を歴任。北東アジア学会理事。 ワシントンDC 開発フォーラム幹事。</p>	<p><b>特定非営利活動法人 NICE 代表</b> <b>開澤 真一郎（かいざわ・しんいちろう）氏</b></p>  <p>神奈川県出身・在住。一橋大学在学中の1990年に NGO・NICE を設立し、92年から専従職員。アジア9ヶ国で活動立ち上げ。19年間に2301回の事業主催と38,612人のボランティア参加を統括。 NVDA（アジア・ボランティア発展ネットワーク）事務局長。国連・CCIVS（国際ボランティア活動調整委員会）副代表。国土館大学講師。</p>
<p><b>ジョージタウン大学公共政策大学院修士</b> <b>小林 隼人（こばやし・はやと）氏</b></p>  <p>2008年まで3年間、世界銀行環境局にて主に戦略的環境アセスメント(SEA)を担当。 現在は、イギリスで博士課程に在籍しながら、米国ワシントンDCのシンクタンクで環境や開発関連の研究を続ける。計画行政学会を通じて、新 JICA の環境ガイドライン策定にも参加。</p>	<p><b>大和証券グループ本社 CSR 室</b> <b>岩井 亨（いわい・とおる）氏</b></p>  <p>2009年4月大和証券グループ本社 CSR 室 上席次長。 1983年4月大和証券入社。札幌支店、アメリカ大和証券、大和香港、大和証券ファンド・プランナー部、大和証券 SMBC 事業法人部、同投資銀行企画部を経て現職。出身地北海道。 1983年3月学習院大学文学部(哲学科)卒。日本証券アナリスト協会検定会員。</p>
<p><b>NPO かものはしプロジェクト サポーター事業部 &amp; 調査事業マネージャー</b> <b>明治学院大学 非常勤講師</b> <b>可部 州彦（かべ・くにひこ）氏</b></p>  <p>※可部様には、座談会講師のほか最終発表審査員も務めていただきました。 ※プロフィールは、08-02.最終発表審査員紹介をご参照ください。</p>	<p><b>NEC CSR 推進部社会貢献室長</b> <b>東 富彦（あずま・とみひこ）氏</b></p>  <p>NECへ入社後、企業向けソフトウェアの研究開発に従事。06年社会貢献室へ異動、08年4月より現職。 NECがNPOと協働で実施している「NEC 社会貢献プログラム」をはじめ、全世界のNECグループ社員が参加するボランティア運動「NEC Make-a-DifferenceDrive」など、NECの社会貢献活動全体を統括。 近年は「NEC 社会起業塾」、「NEC 次世代社会イノベータープログラム」など社会起業家の育成に積極的に取り組んでいる。</p>

### 12-02.概要

国際開発に関心の高い者同士の交流の機会を提供することは、idpcの目的の一つである。国際開発分野の働き口は少ないと言われるが、そのキャリアパスは多様だ。クロストレーキングの目的は「国際開発分野のキャリアパスの視野を広げるための交流機会の提供」である。そのため、世界銀行やNGO職員、企業のCSR部など様々な方法で国際開発に携わる方々にお越しいただいた。また、一方的な講義ではなく双方向のコミュニケーションが生まれるよう、社会人の方1名に対し参加者10人程度と少人数制での座談会形式をとり、できるだけ多くの社会人の話を聞けるよう参加者は自身の興味に合わせて自由に席を移動できるようにした。

途上国の最前線で活躍する社会人と間近で交流する機会は今無いため、参加者からは貴重な機会で大変ためになったと好評だった。

## 12-03.参加者の声

- 「近距離で途上国のフィールドで活躍している人と話すことができてよかった」
- 「様々な職種の方々の話を聞けるチャンスはめったにないのでとても良かった」
- 「自分の興味ある分野の人の話を直接聞くことができ、キャリアプランの参考になった」

## 13.クリスマス・イヴイヴイヴパーティ

---

二日目の夜に、交流の一環としてクリスマスパーティを開催した。ケーキや軽食・ソフトドリンクを囲んで談笑し、交流のきっかけとなった。時間内に話しかけた人の名前をマス目に入れて、ビンゴを行う「人間ビンゴ」も行い、参加者・スタッフ・講師の方々との会話の機会となった。

## 14.中間発表・最終発表

---

### 14-01.中間発表

3日目には、二人の審査員を迎えての中間発表が行われた。開発分野の第一人者である審査員の方々によるフィードバックを通して、各チームの発表は格段にブラッシュアップされたようであった。

### 14-02.最終発表

3泊4日の成果を、各チームが制限時間内で存分に発揮した最終報告であった。各審査員の方々から投げられる鋭い質問にも各チームが十分に対応していた場面も多くあり、各チームの入念な準備の様子が窺いしれた。

最終報告・結果発表ののち、審査委員の方々から発表に対するコメントと、激励の言葉もいただき、参加者にとっても実り多い時間となった。

## 15.表彰プラン紹介

---

### 1位 C : Team CAC

『Cambodia Agricultural Cooperative』  
農業の生産性を向上させるためにSRI農法を導入するとともに、CACによる農業教育をすることで、農業技術を伝えられるリーダーの育成を目指す。またCACが介入し、正当な料金で取引を行い、全ての作物を生産者から買い取る保障や不作時も補助金を保証することで販売ルートの確立を目指す。

### 2位 B : JU・TAMA~SE

『カンボジアにおける農村開発』  
カンボジアにおける農村の生産性の低さに注目した。技術不足と化学肥料不足をSRI農法とコンポストを導入することで解決を図る。コンポストにおいては人糞も混ぜることで、衛生状態の改善や、価格肥料からの脱却を目指す。またそれは学校などの公共施設に集めることを特徴としている。

### 3位 E : 仮想非営利法人アグリス・チャン

『エネルギー資源』  
石油の輸入や伝統的な燃料（薪など）に頼っているカンボジアのエネルギーの現状から、カンボジア自国内でエネルギー資源を生産することでエネルギー自給率をあげ、脆弱性をなくすことを目指す。そこで降水量、土壌に影響を受けにくいなどの特徴を持つ、ジャトロファに着目し、エネルギー資源として利用することを目指す。

## 16.その他プラン紹介

### A：社会人（仮）

『Peace for Disabilities』

地雷被害者の尊厳を高めるため、地雷被害者を雇用し、伝統工芸品（バッグ等）を製造・販売する。特徴的なタグを製品につけることで既成品との差別化を図る。そしてNGO等によるスタディーツアーに作業所を組み込み、訪問者に対して取り組みを公開することで、職員におけるやりがいの向上を図る。またミス・Landmine キャンペーンを行うことで販売を促す。

### F：Team もみもみ

『貧困の連鎖を絶つ！～農村からカンボジアを～』

教育はすべての問題解決の礎だとし、15年で全国の小学校卒業率100%を目標に、初等教育を普及させ、子供たちを貧困のサイクルから救うことを理念とする。地域コミュニティを作り、学校と家庭を連携させ、また教員養成所を併設することで教育の向上を図った。学校においては農業の授業を開くことで、持続的な農業の発展を目指す。

### H：TEAM KANI

『障がい者×CSR×中間層』

教育、仕事、福祉の面で深刻な問題を抱える障がい者に着目した。拡大する中間層や繊維産業を背景に外資のアパレル企業を誘致し、CSR活動によって、障がい者の雇用を創出する。障がい者の自立や地位向上を目指し、また外資企業にとっては、社会貢献することでブランドイメージの向上を図れ、同時に中間層にとってはニーズも満たすことができる。

### J：頑張るJ(ジェイ)!

『都市の校庭を利用して農村の収益アップをはかるNGOの設立』

農村の貧困層をターゲットとし、農作物が正当な価格で取引するため、新しい所得形態として、NGO介入による直販体制の確立を目指した。また取引の場を都市の校庭を利用することで、情報や意見、技術の交換がなされ、生産性の向上が期待できる。また都市も安くモノが手に入るメリットを享受する。

### D：王立ダモのチョコレート工場

『負のスパイラル転換』

農村で多く生産されているコメのもみ殻と藁を利用して、産業の発展を目指す。コメをリソースとして、電力を発生させる方法、バイオエタノールを生成する方法の二つを採用することで、資源の拡大を図る。また電力インフラ整備と産業化により、農業以外の職業で自立できる道が拓け、またそれに実際に関われるような交通インフラの確立によって、負のスパイラルから抜け出せることを示した。

### G：GurGram

『基礎教育の可能性』

子ども達に平等な可能性を与え、カンボジアにおける様々な問題の解決に寄与することを理念に掲げ、初等・中等教育を全ての子ども達に提供することを目指す。農村に進学塾を設立し、教師を養成し、農村の子ども達へ教育の機会を与える。また都市部の進学塾においては、高い授業料を徴収することで、利益の創出を図る。

### I：AI

『Farm for Farmers』

“ソーシャルビジネス”により先進国と農村をつなげて小規模農家に安定収入をもたらすことを理念に、ネットビジネスに焦点を当てた。インターネットを通じバーチャルなFarmで現実のFarmersに投資をするシステムを構築し、先進国と農村を結び付けることで、カンボジアの小規模農村は安定した収入源を得られる。

## 17.審査員紹介と講評

### 17-01.中間発表 審査員紹介

#### 株式会社アイ・シー・ネット

#### 畔上 尚也（あぜがみ・なおや）氏



大学卒業後、都市銀行に約5年間勤務。

その後、2年間の英国留学を経て、アイ・シー・ネット株式会社にて約13年間コンサルタントとして勤務。アジア、アフリカを中心に、マイクロファイナンス、地方電化、地方行政などの分野の調査・プロジェクトに従事。

#### 外務省中東アフリカ局アフリカ第二課

#### 作元 理江（さくもと・りえ）氏



米国大学院修了（開発学専攻）後、NGO、青年海外協力隊、JICA、UNDP、在外公館での勤務を通じて途上国支援業務に携わる。特に参加型開発・貧困削減・開発援助協調分野での幅広い活動経験を持つ。

現在外務省アフリカ第二課にTICADIVフォローアップ担当官として勤務。

※五十音順

17-02.最終発表 審査員紹介

<p><b>株式会社アイ・シー・ネット</b>  <b>畔上 尚也 (あぜかみ・なおや) 氏</b></p>  <p>※畔上様には中間発表に続いて、最終発表も審査員を務めていただきました。          ※プロフィールは、08-01.中間発表審査員紹介をご参照ください。</p>	<p><b>ジョージタウン大学公共政策大学院修士</b>  <b>小林 隼人 (こばやし・はやと) 氏</b></p>  <p>2008年まで3年間、世界銀行環境局にて主に戦略的環境アセスメント(SEA)を担当。現在は、イギリスで博士課程に在籍しながら、米国防務省 DC のシンクタンクで環境や開発関連の研究を続ける。計画行政学会を通じて、新 JICA の環境ガイドライン策定にも参加。</p> <p>※小林様には座談会に続いて、最終発表も審査員を務めていただきました。</p>
<p><b>日本開発政策研究所副社長</b>  <b>泉 泰雄 (いずみ・やすお) 氏</b></p>  <p>日本興業銀行(現みずほコーポ銀)国際部門を経て EBRD・世銀での10年間勤務。現在は開発コンサルティング企業に勤務。東欧・中東・アジア諸国への国家レベルアドバイザーとして活躍。神戸大学客員教授、開発勉強会 Saturday Forum 主宰。ICU(BA), Paris 大学(MBA) 卒。</p>	<p><b>GNH 研究所代表</b>  <b>平山修一 (ひらやま・しゅういち) 氏</b></p>  <p>早稲田大学大学院アジア太平洋研究科修了。長谷工コーポレーション勤務後、ブータンでの青年海外協力隊に参加。その後、国際協力機構(JICA) 専門家として通算7年間タイ、モンゴル、ブータンにて主にガバナンス分野(地方行政改革)で活躍。タイでは地方行政法典の編纂業務に携わる。</p> <p>現在、GNH 研究所代表幹事。(株)CSJ 開発・調査部主任研究員。大東文化大学人文科学研究科兼任研究員。開発技術学会、環境福祉学会、環境社会学会、関係性の教育学会会員。一級建築士。</p>
<p><b>NPOかものはしプロジェクト サポーター事業部&amp;調査事業マネージャー</b>  <b>明治学院大学 非常勤講師</b>  <b>可部州彦 (かべ・くにひこ) 氏</b></p>  <p>アメリカ合衆国カリフォルニア州政府の社会保障政策 CalWORKs プログラム担当として、生活保護を受けている母子家庭の経済的自立支援政策や教育機関との連携等に従事。</p> <p>2005年10月から、かものはしプロジェクトカンボジアオフィス現地代表として現場オフィスのプロジェクト企画立案、総括を担当し、現地の国際機関や大使館等と連携しながらプロジェクトを推進、2008年5月から東京事務所サポーター事業部に勤務し、法人営業や講演会等にかものはしプロジェクトの広報を担当する。</p> <p>明治学院大学で非常勤講師を務める。</p>	<p><b>野村総合研究所 社会システムコンサルティング部</b>  <b>コンサルタント</b>  <b>松岡末季 (まつおか・みき) 氏</b></p>  <p>2008年野村総合研究所入社。大学では都市計画を専攻。入社後、「海外経済協力政策をめぐる国際動向調査」に携わり、「BOP ビジネス」の知見を深める。今年度はベトナム、インドネシア、エジプト、タンザニアで現地調査を行い、BOP 層の実態、官民連携による MDGs 達成の試み、ビジネスによって社会課題解決を図る取り組み等について調査した。</p>

※五十音順

## 18.フィードバック

---

初日に各自立てた目標の達成度を自己評価し、チームメンバーから立てた目標や良い点・改善点を正直にフィードバックしてもらった。アンケートからは「一緒に過ごした仲間からフィードバックをもらえるのはありがたい」「今後自分の能力を高めるために大変参考になる」と言っていた。

## 19.閉会式

---

プログラムが全て終了し、最後に代表挨拶で弊実行委員会に関わってくれた全員に感謝を伝え第2回 idpc2009 は閉幕した。

## 20.懇親会

---

すべてのコンテンツの終了後、新宿にて懇親会を開催した。多くの参加者とスタッフが参加し、さらなる親睦を深めた。

日にち……………12月24日(木)

時間……………18:00~20:00

会費……………3500円(立食形式)

場所……………新宿ライオン会館6階  
(東京都新宿区新宿3-28-9)





## 21. アンケートより

---

### ○各コンテンツ

講演や座談会といったコンテンツでは第一線での活動を聞くことで、キャリアパスを考える貴重な機会となったようだ。また、プレゼン講座で学んだ効果的なスキルは最終発表で実践でき、「今後の役に立つ」という声が多かった。

さらにチーム内のフィードバックでは、共に過ごした仲間から客観的評価を得ることで、課題の発見や自信に繋がったと考えられる。それぞれ非常に人気が高く、参加者のニーズにあっていったようだ。

### ○主旨・目的

「国際開発分野において有効となる自己成長につながったと感じるか」「チーム内での交流は十分だったか」という質問にほぼ全員が「そう思う・まあそう思う」と回答している。さらに第1回目で「不十分である」が全体の7割を占めていた「参加者全体の交流」については、今回8割以上の参加者が「十分に交流が出来た」と感じており、前回残した課題を克服できたと言える。

### ○プランニング

課題はカンボジアに特定したが、それ以外の条件を設けなかったため、「渡航経験や事前知識によって差が出る」「設定条件が自由すぎる」という意見が多く、制限がなかったことで、自ら問題を設定することに多くの参加者が苦戦したようだった。

一方、逆にその自由さから「取り組みやすい」と答えた人や、「プランニングの過程での難しさが楽しくもあった」という感想もあり、参加者にとって学びの多い課題だったようだ。

また今回導入したインターネットの利用環境がチームにより異なっていたため、公平でないと感じる参加者も多く、今後はこの使用に関して検討する必要がある。

### ○全体

全日程を振り返り、参加者全員が「参加して良かったか」という問いに「そう思う」「まあそう思う」と回答したことから、コンテスト自体の満足度は非常に高かったようだ。

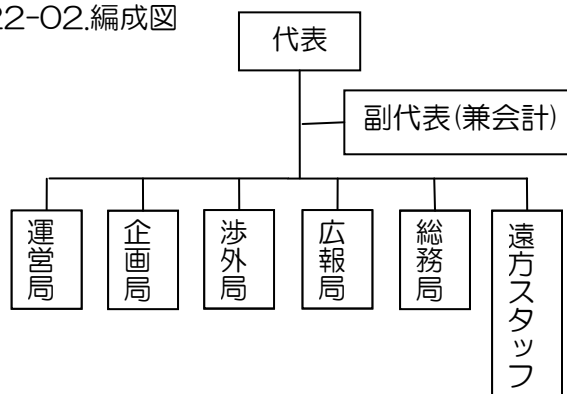
しかし、「期待に沿った内容が提供されたか」という問いには、全体のおよそ2割弱が「そう思わない」としている。タイムマネジメントや参加者対応など運営側のミスがその一因として挙げられ、反省点となった。

## 22.団体概要、編成図、一年間の活動とタイムライン、スタッフ

### 22-01.団体概要

国際開発プランニングコンテスト実行委員会（以下、idpc 実行委員会）の概要は右図の通りである。右図のような組織形態をしているが、各局とも少人数であるため必要に応じて局を越えて業務を行っている。

### 22-02.編成図



※ 国際開発プランニングコンテスト実行委員会 編成図

スタッフの学年は学部2年から修士2年までで、スタッフの専攻分野は国際関係のみならず法学、経営学、経済学、理工学、看護学と多岐にわたり、大学もばらばらだった。

### 22-03.一年間の活動

弊委員会の活動概要は以下の通りである。第2回 idpc2009 開催に向けて、弊委員会の活動は、2009年6月7日のキックオフミーティングに始まり、コンテスト開催の12月、そして反省会や報告書作成、引継を行った2010年2月までの約9カ月である。活動期間はその内容から大きく4つに分けられる。

#### 1. コンセプト決め期間

ミーティングが開始され、今期の活動の根底となるコンセプトを決めた。具体的には理念と、問題意識、解決策としてのコンテスト内容をどうするかを話し合った。また、代表・副代表決めも行った。

#### 2. 準備期間

コンセプトが固まりコンテスト内容が決定したところで、それを達成するためのスケジュール作成をした。またそれと同時に、各局の業務を知るために業務内容の計画書とスケジュールを局ごとに作成した。

#### 3. 開催準備活動期間

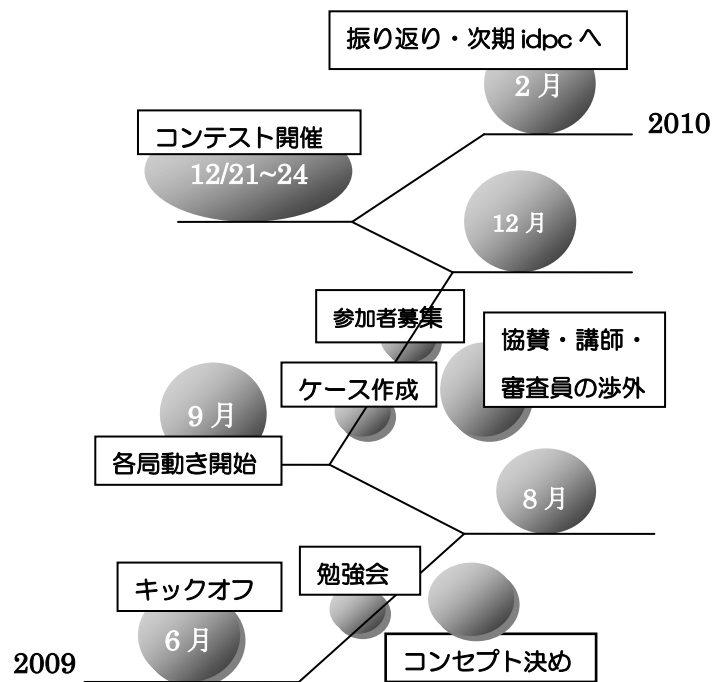
作成したスケジュール通りに各局の動きに移った。プランニングのケース作り、協賛・審査員・講師の渉外活動、コンテスト広報活動、コンテンツ内容の深化、コンテスト運営の準備、参加者募集などである。スタッフ数が少なく苦労したときもあったが、少しずつ業務を完了していき、開催を迎えた。

#### 4. 活動総括期間

コンテスト後は、第2期の振り返り、報告書(弊冊子)作成、引継資料作成と、第2期のまとめをして次期 idpc 実行委員会のための準備を進めた。



## タイムライン



## 22-04.スタッフ

代表	佐藤 淳	企画局 局長	鶴木 由美子	Special thanks	
副代表・会計	佐久間 克也	企画局	西岡 悠美子		眞鍋 清嗣
運営局 局長	北川美佐	渉外局 局長	山城 結佳		伏見 智恵
運営局	石川 隆彬	渉外局	岡田 雅利		岩本 聡美
運営局	斉藤 杏奈	広報局	阿部 幸那		海谷 奈々子
運営局	入江 達也	総務局	渡邊 優		服部 由布子
運営局	村井 博満				諏訪 ゆう子
運営局	白木 綾自				北村 玲雄奈
					藤原 萌美

## 23. 団体理念・目的

---

弊委員会の理念は「国際開発の分野で活躍できる人材の育成に貢献することにより、途上国の発展に寄与する」ことである。この理念に基づき、弊委員会が考える2つの問題を解決することが第2回 idpc2009 の目的だ。その問題意識とは、(1)国際開発の分野で必要とされる知識・能力を身につける機会が少ない(2)国際開発に強い関心を持つ同志が、交流・議論する機会が少ない、であり、これらの機会をコンテストという場で提供することとした。以上を6月から8月までの2ヶ月間議論をし、幾度も紛糾しつつも第2回のコンセプトとしてまとめ上げた。

## 24. 定期ミーティング

---

6月の最初のミーティングから週1回の定期ミーティングをコンテスト開催まで行った。ミーティングは基本的に、以下の内容で行った。

【日時・頻度】 毎週火曜日 18:00~21:00

【場所】 主に東京大学 本郷キャンパス

【アジェンダ】 各局1週間の活動進捗・今後の予定報告、全体に関わる事項の方針議論、全体のスケジュール確認など

6月から8月初めまでは勉強会と idpc 実行委員会の理念・目的を確認すると同時に第2回 idpc2009 のコンセプト(問題意識の共有とコンテストの内容)を決めた。8月初めから9月までは仕事内容の計画書とスケジュール作成をした。それ以降は各局の動きに移り、コンテスト開催に向けて準備をしていった。

## 25. 模擬コン

---

活動は都内で週に1度行うスタッフ全体でのミーティングを中心として活動し、コンテスト本番のケースやアイデア段階のサブコンテンツの試行として模擬コンテストを行っている。

## 26. ケース作成

---

今回のケースは、カンボジアという実在の国を舞台とし、資源や経済状況などの資料を提供し、プランニングのベースとして使用した。

## 27. 広報

---

コンテスト開催に当たって、参加者募集の広報は mixi のコミュニティや NGO のメルマガ、国際協力関係の掲示板への投稿を行った。

また、フライヤーを作成し、各大学・イベント・知人への配布を通して face to face の広報も同時に行った。

## 28. 決算報告

---

I. 収入項目		
参加費		¥611,000
協賛		¥145,000
収入計		¥756,000

II. 支出項目		
1. 運営関連費		
施設費	宿泊費	¥219,000
	会場費	¥104,300
食費		¥97,820
サブコンテンツ飲食代		¥15,227
講師関連費	謝礼費	¥132,000
	飲食費	¥6,342
合計		¥574,689
2. 企画関連費		
資料作成費		¥42,476
インターネット関連費		¥23,880
その他		¥5,770
合計		¥72,126
3. 広報関連費		
参加者募集費		¥7,100
合計		¥7,100
4. 渉外関連費		
交通費・交際費		¥17,400
スタッフ採用関連費		¥12,240
合計		¥29,640
5. 経理関連費		
合計		¥3,848
6. 総務関連費		
WEB管理費	サーバー管理費	¥4,560
	メールアカウント料	¥1,950
名刺作成費		¥1,610
合計		¥8,120
支出計		¥695,523

III. 当期収支差額	
	¥60,477

## 29. 協賛団体

---

株式会社ジースタイル様



日本公文教育研究会様

